日本の観光業は、

国内旅行に

日本の観光業が掲げるべき

のミクロな実践が、いかにして「世界出発し、「旅」や「観光」という個人

この個人的な問題意識から

光を見出した。

ものである。この考えに、

論文コンテストの入賞作品を、10月6日 号から順次掲載しています。

らの問題提起

はじめに:個人的な体験か

が実現すれば、世界る2030年に60

世界3位となる。急成600万人の訪日客

長真っ只中の観光業界は、日本の基幹

て、現代こうナーである。最後に、吉舎である。第四章では、旅の持つ限界と課題である。第四章では、旅の持つ限界と課題を指摘し、平和への貢献を最大化するといめの方策を探る。最後に、吉舎である。第四章では、旅の持つ限界と課題にあるがある。最後に、吉舎である。

子供たちの映像をテレビで見たとき、こどもの頃、湾岸戦争下で泣き叫る のとき、 家を壊され、家族を奪われ変わらない年齢の子供が、 という事実に、 が、今まさに同じ地球上で起きて すら危険にさらされている。この紛争 私は大きなショックを受けた。 子供たちが笑顔になれる世界を 、幼心に「この世界の課題を解事実に、私は言葉を失った。そまさに同じ地球上で起きている 家族を奪われ、 湾岸戦争下で泣き叫ぶ ある日突然 自らの命

界の状況は本質的に変わっていない。 手元に届くのだ。物理的にも感情的に 手元に届くのだ。物理的にも感情的に 手元に届くのだ。物理的にも感情的に を駆け巡る。遠い国で起きている今 界を駆け巡る。遠い国で起きている今 別の出来事が、世界中の一人ひとりの 別の状況は本質的に変わっていない。 え、その約3割が子供であるとイスラでは紛争開始以降の死者が6万人を超では紛争開始以降の死者が6万人を超においても「争い」は問題解決の手段においても「争い」は問題解決の手段 ル・ハマス紛争、2024年のイランクライナ侵攻、2023年のイスラエたない。2022年のロシアによるウ たよハ。2022年のコンアこよるウ家間の対立や民族紛争はいまだ後を絶 ム組織ハマス運営の保健当局が発表し すない。世 である。 は、ごく一部の例外を除き、あらゆる平和と相互理解に基づく協調関係

を背けがちになる。「誰かが何とかし優先するあまり、世界の出来事から目無力感を覚え、あるいは自国の課題を 考えてきた一人である。 こともできない」。私自身、長年そうてくれるだろう」「自分にはどうする こうした現実に対し、 観光業に深く携わる中で、 「誰かが何とかし 多くの人々は

との出会いである。平和の維持には、光は平和へのパスポート」という言葉は、1967年に国連が提唱した「観さ、1967年に国連が提唱した「観

ず、貧困や差別といった構造的暴力を争がない状態(消極的平和)に留まら を消し去る力を持つ。これは、単に戦の連鎖という「紛争の火種」そのもの いく「積極的平和」の考え方その除き、公正な社会を積極的に構築 私は一条の れらの潜在的な旅行者がマーケットにだ国際的な旅行を経験していない。この大多数は、経済的な理由などからま先にこそ開かれる。現在、世界の人口先にこそ開かれる。現在、世界の人口 参加すれば、その規模は現在れらの潜在的な旅行者がマー にも成長するポテンシャルを秘めてい

の多様な成功事例をモデルケースと役割がある。観光先進国として、国内ここに、日本の観光業が果たすべき に提示する。それこそが、日本の観光の創造」という大きなビジョンを世界し、経済的利益の追求を超えた「平和 業が世界を牽引し、100年後も輝き

性、そして日本の観光業が担うべき役献しうるのか、そのメカニズムと可能平和」というマクロな理想の実現に貢

3年に世界12位となった。日本が掲げ界観光機関)の発表によれば、202訪日客数はUN Tourism(世は自動車産業に次ぐ規模へと成長し、 において 世 互依存関係と平和構築への貢献を考察は、観光という経済活動がもたらす相イプの克服について論じる。第二章で旅がもたらす異文化理解とステレオタ 本稿の構成を提示する。第一章では

ニュースやドキュメンタリーなどので感じることに繋がる。この共感は

の人々が抱える日常の喜びや苦悩を肌中に一時的にでも身を置くことは、そ

なく「体験」である。 旅先での出会いは、

。他者の暮らしの

無関心からの脱却と失敗か

作りたい」と強く願った。 あれから30年以上が経った今も、 イノベーション事業とは見なされにくくから存在する産業であり、最先端のない側面がある。それは、観光業が古 ていることは間違いない。一方でその産業として確実にその階段を登り始め いからなのかもしれない 社会的評価は経済規模に追いついて

の醸成

第1章:異文化理解の深化と共感性本論 本語

る。

対して考え始める重要なきっかけとな 実を認識することこそ、世界の課題に

日本の観光業が真の基幹産業となる

る。しかし、実際こそりともですし、する一面的なイメージを固定化させタイプ」は、異文化や他国の人々に対タイプ」は、異文化や他国の人々に対

の会話などから形成される「ステレオ持っている。メディアや教育、家庭内性者への先入観や偏見を揺さぶる力を

らの場所を訪れる「ダークツーリズム」ボジアのキリング・フィールド。これビルケナウ強制収容所、あるいはカン

平和記念資料館、アウシュヴィッツ=いても決定的な役割を果たす。広島の

この「五感体験」は、歴史認識にお

ない。日本も戦後80年を迎えても、今は、単に悲劇的な歴史を学ぶ行為では

私たちが無意識に抱えて

ステレオタイプの解体

端に触れることで、こうしたイメージ現地の人々と会話を交わし、生活の一る。しかし、実際にその土地を訪れ、

続けている。どのようにして、このよに生きる私たちにも、深い影を落としなお多くの人の死は日本の歴史と現代

うな結果を招くプロセスを経たのか

は次第に揺らいでいく。

提言する。このビジョンこそ、ソフトパワーによる安全保障の 保障に莫大な投資を続けてきた。本稿「恐れ」と「不信」を前提とした安全 ソフトパワーによる安全保障の構築を観光がもたらす交流と相互理解という 産業の活動基盤となる。世界は、ごく一部の例外を除き、 観光業が世界に示すべき新たな価値で は、それとは異なるアプローチとして、 本稿が探求する中心的な主題で 軍事力による抑止、 世界は長きに つまり

ある。 維持・拡大し続けることが絶対条件で 観光ビジネスが持続的に発展するにな生存戦略であり、成長戦略でもある。 は、単なる理想論ではない。それは、観光業が「世界平和」を掲げることョン:なぜ「平和」を掲げるのか 00年先を見据えた、 世界の旅行マー 〇〇年先を見据えたビジ ーケッ・ 極めて実践的 が安定的に

つける。 る」という厳然たる事実を我々に突き平和でなければ成り立たない産業であ を冷え込ませ、マーケットは急激に縮的な情勢不安は瞬く間に旅行マインド した。この歴史的教訓は、 *5~~~~三)等声戈弁寺、世早しかし、このマーケットは極めて脆 年の湾岸戦争時 「観光は いる」――そうした発のと違った」「案外、 する理解と敬意を育む出発点となる。いる」――そうした発見は、相手に対

このソフトパワーは、目に見える紛争フトパワーが不可欠である。そして、りが実践できる人的交流、すなわちソ

にけでなく、水面下で燻る不信や憎悪

よる抑止だけでなく、私たち一人ひと軍事力や経済力というハードパワーに

その規模は現在の数十倍 価値観と出会うことは、自らの前提を価値観と出会うことは、自らの前提を が、それを乗りずそう・・・・の出会いはしばしば混乱や驚きを伴う さも再認識する効果がある。異文化と

固定概念すら見直すことができる、平に留まらず、自分たちのことに対する オタイプの解体は、相手方への先入観さと柔軟さを身につけていく。ステレが、それを乗り越えることで人は寛容 和構築の第一歩である。

続けるための道筋なのである。 論文の構成

旅は世界を平和にするか

日本の観光業が作るべき未来



尾不動産入社。2009年12月淡路関係法学科卒業。2005年4月田関係法学科卒業。2005年4月田 島観光ホテル入社。 同社代表取締役就任。 2021年3月 牟生。 20

価値観と出会うことは、自らの前提をに対する視野の狭さでもある。多様なの誤解だけでなく、「自分」や「自国」旅によって解体されるのは「他者」へ 自分たちと似て トとなり、二度と過ちを繰り返来事を「追体験」することで、 る。 **人類は、対岸の火事ではなく、** 3. コミュニケーションの重要 二度と過ちを繰り返さな

いに直面することもあるが、それでも観光の現場では、言語の壁や文化の違ニケーションなしには成り立たない。 目線の温かさが心を通わせることもあが通じなくとも、笑顔や身振り手振り、 ロセス自体に価値がある。たとえ言葉 何とか相手に想いを伝えようとするプ

た、観光客と受け入れ側とのコミュニた、観光客と受け入れ側とのコミュニが相互理解を深める土壌を育てる。まる。こうした「伝えよう」とする姿勢 景を「知ろう」とする謙虚さと、対話である。重要なのは、相手の文化や背こともあるが、それもまた学びの機会 時に誤解や衝突を生む

空気を感じ、想像力を重っています。全気を感じ、想像力を重っているの土地のを学ばなければならない。その土地の胆分をでるためにも、この失敗の多く という人類共通の学びに繋がるのであ 自分ゴ 明日の

真の異文化理解は、双方向のコミュ う概念は極めて重要である。ハーバー理解する上で、「ソフトパワー」とい理解する上で、「ソフトパワー」とい

性

の信頼性や影響力を高める無形の資産なイメージは、国際社会における日本なイメージは、国際社会における日本なイメージは、日本に対して好意的な感を外国人は、日本に対して好意的な感が、日本に対して好きのは、 によって他国を惹きつけ、自国の望むによって他国を惹きつけ、自国の望むによって他国を惹きつけ、自国の望むによって他国を惹きつけ、自国の望む結果を得る力を指す。 る。アニメや和食といった日本の文化、るための最も効果的な手段の一つであている。このソフトパワーを醸成す

上村 早苗氏 【著者略歴】1981

最終的に戦争に舵を切る判断をするが、首相や大統領は民意により選出さが、首相や大統領は民意により選出さが、首相や大統領は民意に大きな影響を及ぼすことを、国民自体が認識し、無関心から脱却し自分ゴトとして、はっきりとした意志を表明するべきである。 てこ 2 ソフトパワーとしての観光

地化も、地域の在り姿を変容しているもの配慮を行い、最小限の負担に抑えることである。無理な開発による観光を引きらことが決してないように、最大をが訪れることで、その価値が落ちて者が訪れることで、その価値が落ちて ことになる。

旅行者と住民が良好な関係を築くこと意を払い、その価値が守られるよう、意を払い、その価値が守られるよう、た、をの地域を守る住民の生活にも敬た、歴史へ敬意を払うことである。ま 2. 社会・文化への配慮

れ、地域経済全体が潤う仕組みを作る元の事業者や住民にきちんと還元さの大企業に独占されるのではなく、地の大企業に独占されるのではなく、地観光によって得られた利益が、外部観光によって得られた利益が、外部を目指す。

ある。旅先での会話の一つひとつが、ある。旅先での会話の一つひとつが、り、距離すら超える強い絆で結ばれたり、距離すら超える強い絆で結ばれたり、距離すら超える強い絆で結ばれたり、距離すら超える強い絆で結ばれたとがいえるものである。世の中の課題の多くは、「コミュニケーション不足」によるものである。世界中が旅を通じて人的交流を図れば、人類全体が大きく人的交流を図れば、人類全体が大きく成長し、「争い」とは違った選択肢によって課題を解決できるようになるは、できない。

喜びを持つ一人の人間として世界の事れるべきは「無関心」であり、痛みやは、人それぞれでかまわない。最も恐

実である。その事実をどう捉えるのかとして自らが五感で感じて理解した事報のみでは得がたいものである、人間

和への貢献第2章:経済的相互依存の構築と平 ずである。 2.

程済的な相互依存は、戦争を回避す 経済的な相互依存は、戦争を回避す

ツーリズム)は、「観光地の環境や文片続可能な観光(サステイナブル・ムとコミュニティの役割2.4.サステイナブル・ツーリズ 考える。

2. 4. 1. 訪つの視点がある。 いこう」という考え方である。主に3未来の世代まで続けられるようにしてりながら、経済的にも成り立つ観光を 化価値、そこに住む人々の暮らしを守 訪れた地域の在り姿へ 「観光地の環境や文

顧客に対し、 しく理解し正しく届け、1次産業が、顧客に対し、「地域の宝」の価値を正

しく理解し正しく届け、1次産業が、しく理解し正しく届け、1次産業が、とり付加価値の高いモノづくりを行うより付加価値の高いモノづくりを行うより付加価値の高いモノづくりを行うより付加価値の高いモノづくりを行うより付加価値の高いモノづくりを行うより付加価値の高いモノづくりを行うより付加価値の高いモノづくりを行うより付加価値の高いモノブくりを行うより付加価値の高いモノブくりを行うという。 となる。まずは日本国内での仕組み化特に1次産業からの支援が重要な手段 と成功事例に期待する。 まずは日本国内での仕組み化

3. 1. 「国民」から「地球市民」第3章・グローバル市民意識の育成

観光による経済的相互依存

災害が、能登半島地震とそれによる事ならない。私たちの中で記憶に新しい経済活動を行うことが可能でなければと同時に災害後も被災者がその土地でと同時に災害後も被災者がその土地で し、解決へと導くことができるものとし、解決へと導くことができるものと ニケーションによって課題を明確化 の聞き取りは必要だが、これもコミュ 被災した地域とのすり合わせや、要望 として復興を支援することができる。 て、一時的な支援ではなく、経済活動めることで、能登の現状をその目で見たなツーリズムを立ち上げ、集客に努

観光地の美しい資源や自然を、旅行

の配慮

私たちは単なる一国の「国民」ではなグローバル化が進む現代において、

する。

スペイン・バルセロナ

とりの現代と言言って、
外交)」の重要な一翼を担う。一人ひがリック・ディプロマシー(広報文化でリック・ディプロマシー(広報文化間企業や個人が主体となって行う「パ間企業や個人が主体となって行う「パートー る次元で、国家の安定と平和に貢献すハードパワーによる安全保障とは異な 補完・強化する。このように、観光はを促進し、政府間の公式な外交関係を は、草の根レベルで国家間の相互理解 とりの観光従事者や旅行者が行う交流

る。「日本人として「ごすでして」な場を理解しようとする視野が広が

「日本人として」だけではなく

で、自分の常識が相対化され、他者のなる言語や価値観の中で生活すること

関係は極めて深刻なレベルに達した。

イタリア・ヴェネツィア・

す。異なる文化圏の中に身を置き、異から「地球市民」への意識の転換を促

ることは、地域住民にとって大きな心 害の被害を受けた地域に人が再び訪れいても重要な役割を果たす。紛争や災観光は、破壊された地域の再生にお 2.3.紛争後の平る力を持つのである。 紛争後の平和構築と観光

欠な産業である。私たち観光業はそもなどの一次産業は、観光業に必要不可などの一次産業は、観光業に必要不可る米不足。その他の農業・漁業・林業日本でも今年大きな話題になってい を業が生きてこそ、私たち観光業は成産業が生きてこそ、私たち観光業は成立しない。1次産業や地場 分 のものである。「地域の宝」「地域のの1つが、地場産業である1次産業そ 光」が消えてしまえば、そこに人が来のものである。「地域の宝」「地域の 波及した産業である。その「地域の宝」そも、地域の宝である観光資源を元に

実、日本の食料自給率(カロリーベー実、日本の食料自給率(カロリーベー東が波及していないことが窺える。事果が波及していないことが窺える。事まが波及していないことが現ってきていないことが、1次産業が潤ってきていないこと 業への憧れである。私たち観光業は、かし、利用客の期待は、地域で採れたかし、利用客の期待は、地域で採れた次産業の衰退は深刻な状況にある。し 続け、農業部 4歳(2023年)に達するなど、一続け、農業就業人口の平均年齢は8・ (2022年度) と低迷を

4. 1. 旅がもたらす負の側面最大化するための方策第4章:旅の限界と平和への貢献を

民との摩察、女どりきでで、地元住剰な観光開発による環境破壊、地元住に「善」とは言えない側面も持つ。過に「善」とは言えない側面も持つ。過 に重要な課題であるため具体的に考察の訪日客を迎える日本にとって、非常例がでてきている。これからより多く「歓迎」を「敵意」に変えてしまう事 可能性を秘めている。一方で、無条件今まで述べてきたように旅は多くの4.1.旅がもたらす負の側面 地域住民の心に不満や怒りが蓄積し、の奪い合いが起こること。これにより、 源(住宅、交通、静けさ、文化など)(住民)」の間で、地域の限られた資「訪問者(ツーリスト)」と「生活者 光地の高級化など、観光が地域社会に民との摩擦、文化の表層的な消費、観剰な観光開発による環境破壊、地元住 ケースもある。具体的な課題としては与える負荷は深刻な問題となっている 」と「生活者

用が生まれ、地域が長期的に発展してことである。これにより、安定した雇 いくことを目指す。 これらの具体的な実践モデルとし

優秀賞

極めて困難な状況下においても、平和を防ぎ、地域の文化や生活様式を守りを防ぎ、地域の文化や生活様式を守り が挙げられる。CBTは、地域住民がズム(CBT・地域住民主体の観光) くが地域に還元される仕組みである。観光開発の主体となり、その利益の多 コミュニティ・ 外部資本による一方的な開発 地域住民が

外部世界との繋がりを保ち、非暴力的な形で経済的・社会的な抵抗を続けるな形で経済的・社会的な抵抗を続けるな形で経済的・社会的な抵抗を続けるな形で経済的・社会的な抵抗を続けるな形で経済的・社会的な抵抗を続ける は、自らの文化に誇りを持ち、 にとっては、自らの文化に誇りを持ち、 が成村々を歩き、家庭での宿泊や食事 がな村々を歩き、家庭での宿泊や食事 がな魅力を伝え、ステレオタイプを覆 様な魅力を伝え、ステレオタイプを覆 様な魅力を伝え、ステレオタイプを覆 様な魅力を伝え、ステレオタイプを覆 様な魅力を伝え、ステレオタイプを覆 がな対々を歩き、家庭での宿泊や食事 がなが、かでは、旅行者に紛争の にとっては、自らの文化に誇りを持ち、 にとっては、自らの文化に誇りを持ち、 ジェクトが展開されている。旅行者は、ジェクトが展開されている。旅行者は、イブラヒムの道)」のように、地域・トレイル「マスール・イブラヒム えば、 えば、パレスチナでは、ウォーキングを希求する力強い手段となりうる。例極めて困難な状況下においても、平和 ととして捉え直す出発点となる。かれた心を育て、平和を個人の関心ごう契機となる。旅は、世界に対して開う契機となる。旅は、世界に対して開 民問題といった地球規模課題は、い気候変動、貧困、感染症、戦争、 を及ぼす。にもかかわらず、多くの人れも国境を越えて私たちの生活に影響

3. 3. 国境を越えたネットワーク 2. 5. 「地方を生かす」ことが本

得る。 得る。 得る。 には、国境を越えた平和のインフラと がを通じて広がるこうしたネットワー がを通じで広がるこうしたネットワー がを通じで広がるこうしたネットワー がりがその後も続くことがある。SNびを伴う旅では、現地の人々とのつなものではない。特に交流型の観光や学ものではない。「一時の訪問」で終わる て、旅先で出合って、アントを通じい、旅先で出合って、アントでは、アンライン・コミュニティを通じ は、いかなる政治的対立よりも深い理値観を尊重し合う人と人とのつながり 持し、時に再訪や情報発信、国際恊働て、旅先で出会った人々との関係を維

たい」「感じたい」という衝動にからは強制されて行くものではない。「見は強制されて行くものではない。「見は強制されて行くものではない。「見以がなどのではない。」「見いな社会も、訪問者への感謝を忘れず、 配慮、現地経済への貢献意識が求められる。例えば、ゴミの削減やローカルれる。例えば、ゴミの削減やローカルな合かせるなどの小さな行動の積み重に合わせるなどの小さな行動の積み重に合わせるなどの小さな行動の積み 者となる必要がある。観光客には、ible Tourism)」のす 問先の文化や習慣への敬意、環境への 」の実践

高麗で、多くの住民が中心部から追い高騰で、多くの住民が中心部から追い高騰で、多くの住民が中心部から追い 件も発生し、観光客と住民の間の緊張スのタイヤを切り裂くといった襲撃事 た都市の一つ。民泊の急増による家賃(オーバーツーリズムが最も深刻化し)

た境界を越えて、人類全体の幸福と地この意識は、国境や民族、宗教といっの)としての意識を求められている。

球全体の安定した未来を考える視点を 育むものである。旅は、この「国民」

球市民(Global Citizeく、地球全体の未来に責任を持つ「地

に、年間3000万人。うmg/zz-r-は限界に達した。人口約5万人の都市り室による混雑で、街のキャパシティリュー 嘆き、 り客による混雑で、街のキャパシティクルーズ船による環境汚染や、日帰 限し、日帰り客から「入島税」を徴収 実施。市はクルーズ船の乗り入れを制嘆き、大規模な反観光デモを繰り返し たちの街がテーマパークになった」とれる異常事態となった。 住民は「自分に、年間3000万人もの観光客が訪 示となる。 制限・管理しようという明確な意思表これは、観光客を歓迎するのではなく、 する措置を取らざるを得なくなっ

3

2. 地球規模課題への当事者意

では、私道での撮影を禁止する高札がどの対策を取った。祇園の一部エリアとの対策を取った。祇園の一部エリアは所が多発した。住民の不満が高まり、違反が多発した。住民の不満が高まり、は舞妓さんを追いかけるなどのマナーは舞妓さんを追いかけるなどのマナー が社会問題化しました。また、祇園で者などが乗車できない「市バス問題」市バスが観光客で満員になり、高齢日本・京都市: 間に明確な「壁」を作ろうとする動きも取られている。これは、観光客との立てられるなど、住民による自衛措置

である。 されなかった結果である。
これらの事例は、観光が適切に管理 であり、 本来の交流とは逆行するもの

の必要性 4.2.「責任ある観光(Resn改善策を講じることが不可欠である。 ちの事業はたちまち立ち行かなくなる対の効果をもたらす産業となり、私たこのような観光であれば、平和と反 ons:b-は、こうした負の側面を冷静に見つめ、のである。 観光を平和の手段とするに 「責任ある観光(Resp e Touri s m

れが「責任ある観光(Respons観光客・観光事業者・地域社会それぞ旅の負の側面に対処するためには、

でで、 に、フェナレば、 しましまい。 51で れ、現地では五感が感じるままに過ご し、感動する。 もっとも利益を享受す のどちらもがなくてはならないもので あり、旅行者に「責任ある観光」を提 あり、旅行者に「責任ある観光」を提 あり、旅行者に「責任ある観光」を提 のどちらもがなくてはならないもので のどちらもがなくてはならないもので のどちらもがなくてはならないもので のどちらもがなくてはならないもので のどちらもがなくてはならないもので のどちらもがなくてはならないもので のどちらもがなくてはならないもので あり、旅行者に「責任ある観光」を提 旅行者と地域社会を繋ぎ、それぞれの述べる「ファシリテーター」として、提供しなければ、人はこない。あとで を目指すことが、観光事業者の使命で できる仕組みを作り、「共に創る旅」責任をすべての関係者が前向きに履行